

JAF AE Newsletter



No. 31 (August 2010)

第 26 回 全国大会 / 神戸芸術工科大学にて開催



開会の挨拶をする石田新会長

日時： 2010年7月3日(土) 10:00 - 18:10

プログラム

大会総合司会： 相川真佐夫 (京都外国語短期大学)

10:00-10:10 会場校挨拶

会長挨拶： 石田雅近 (清泉女子大学)

10:10-11:40 基調講演「日本の個性—ニホン英語—」
末延岑生 (兵庫県立大学名誉教授・神戸芸術
工科大学講師)

11:40 - 12:10 会員総会

12:10-13:20 昼食休憩

13:20-15:55 研究発表

司会： 田中富士美 (東洋英和女学院大学)

1. "Incorporating World Englishes in English
teaching: A survey in Padang, Indonesia"
Wulan FAUZANNA (Andalas University, Indonesia)

2. "Head movements in Japanese English: Narrative
style conversation"
Saya IKE (University of Melbourne, Australia)

3. "Towards a lexical core of international varieties of
English"
Leah GILNER (Bunkyo Gakuin University)

4. 「World Englishes への認識と発話理解 —日本人英語
学習者を対象とした量的研究—」
花元宏城 (関西大学文学研究科)

5. 「アラブ首長国連邦における英語とアラビア語の相克」
榮谷温子 (東京外国語大学)

15:55-16:05 休憩

16:05-17:55 シンポジウム

「ニホン英語の可能性」

“The possibility of Japanese English”

司会&発題者：ジェームズ・ダンジェロ (中京大学)

“Japanese English: Refocusing the discussion”

発題者：田嶋ティナ宏子 (白百合女子大学)

“The intelligibility of Japanese English”

発題者：小田節子 (金城学院大学)

“The formation and globalization of Japanese
English”

発題者：日野信行 (大阪大学)

“Toward a model of Japanese English”

18:00-18:10 閉会の辞：河原俊昭 (京都光華女子大学)

18:30 懇親会 (大学内D棟カフェ)

会長就任のご挨拶

石田雅近 (清泉女子大学)

3月に行われました理事による選挙により、思いもかけず不肖私が会長に選出される結果となりました。学会の運営経験も学問上の識見も不足していることは否めませんが、会員諸氏のご協力を賜りながら任期を全うしたいと願っています。

本学会は設立から13年目を迎えましたが、これも先輩諸氏のご尽力によるものと深謝すると同時に、責任の重大さに身の引き締まる思いでございます。

本学会の創設から今日まで、公私ともに学会の発展のために全力を傾注され、学会の基盤を確固たるものにしてくださった本名信行先生に改めて御礼を申し上げます。それと同時に、末延岑夫先生、矢野安剛先生、森住衛先生、津田早苗先生、吉川寛先生、橋内武先生、加藤三保子先生をはじめとする先生方のご貢献の大きさは計り知れないものがあります。とりわけ、初代事務局のとりまとめ役をお引き受けいただいた田嶋ティナ先生、事務局組織を盤石にした竹下裕子先生の八面六臂の活躍は特筆に値します。諸先輩のご努力を生かし学会がさらに発展するよう、非力ながら力を尽す所存です。

学会活動の中核的な役割を担う事務局は、これまで同様に重責を担っていただかねばなりません。諸先生方のご意向を伺った結果、相川真佐夫先生にお願いすることになりました。またこの度、理事に選出された先生方からはご就任の快諾をいただくことができました。その先生方と分掌は次の通りです。

榎木菌鉄也先生（ニューズレター）、岡裏佳幸先生（ESSC）、日野信行先生（紀要編集長）、河原俊昭先生（紀要編集）、ジェイムズ・ダンジェロ先生（紀要編集）、齋藤智恵先生（国際交流）、田中富士美先生（Web 管理）、樋口謙一郎先生（会計・会員管理）、三宅ひろ子先生（アーカイブズ）、米岡ジュディ先生（研究開発）

本学会が更に発展するために、次の3点を挙げて課題の再確認をしておきたいと考えます。

1. 「アジア英語」研究の拠点を目指して

時代に先駆けて 20 世紀に発足した「アジア英語」研究に関する本学会は世界でも例をみない存在であり、アジア近隣諸国だけでなく世界からも、その活動・動向が注目されています。この学会がこれまで行ってきた研究・事業活動を精査し、どの領域において海外諸国と協力・連携ができるかを検討しなければなりません。「ころごし」を共有する海外の団体・組織・研究者との共同研究を更に促進したいものです。

2. 求心力のある学会活動の推進に向かって

アジアの時代と言われてから久しくなった今日、国際舞台で果たすべき日本人の交渉力・意志疎通力に対する期待が高まっています。この現状認識を共有する会員が貢献できるプロジェクトを立ち上げ、研究の活性化を図りつつ学会の求心力を高めることが求められています。会員の叡智を生かした研究活動や事業の拡大の可能性を具体的に検討しなければなりません。15 周年記念事業やモノグラフ刊行物に向けて始動することが直近の課題です。

3. 学会財政の安定化を図って

学会の活動を継続的・計画的に前進させるためには、財政を安定させることが不可欠です。会員を増やして年会費全体の増収を図ることが最重点項目となります。同時に、研究プロジェクトの公募枠を拡大するという目的を明確にした寄付事業も視野に入れたいところです。

国内外に影響を与え続ける学会として、情報の発信と研究の活性化を会員皆様と共に推し進め、これまで続けてきた学会事業も円滑に遂行していく義務は、これからも本学会が担い続ける必要があることを最後に強調しておきたいと存じます。

今後とも会員各位の一層倍のご支援と更なるご鞭撻をお願い申し上げます。

**JAF AE 日本「アジア英語」学会
第 26 回全国大会開催報告**

大会実行委員長 岡村光浩（神戸芸術工科大学）

去る 7 月 3 日、神戸芸術工科大学にて、JAF AE 史上初めての芸術系大学での開催となる、第 26 回全国大会が開催された。英語系学会の大会を開催するのは 1989 年開学の本学としても初めてのことである。（開催情報は <http://jafaekobe.intlcafe.info/> を参照）

当日はあいにくの大雨であったが、70 名以上（本学関係者を加えると 90 名近く）が参加する、地方大会参加者数の記録を更新する盛会となったことは、本学にとっても大変な名誉で、英語教員としても開学以来の悲願が実現した思いであった。

基調講演としては、JAF AE 前理事であり本学でも「総合英語」をご担当いただいている末延岑生先生（兵庫県立大学名誉教授）に、「日本の個性—ニホン英語」の演題でご講演をいただいた。「ニホン英語」は、世界の人々がそれぞれ自由に話す「アジア英語」「世界諸英語」があるように、日本人が受容し自然体で話す英語＝ニホン英語を、ありのままに受け入れ、自信を持って話そう、という思想である。先生が唱道し、JAF AE では一定の支持を得ているが、日本の英語教育界全体においてはまだまだ「異端」である「ニホン英語」の将来については、基調講演の他シンポジウム「ニホン英語の可能性」でも議論された。



ご講演は本学における末延先生の、芸工大ならではの「学生の描いたイラストによるフラッシュカード」なども駆使した授業風景の報告から始まった。学生に対する“error-tension free”な環境作りを最重要視した末延先生の指導法は、まさに「ニホン英語」の考え方を反映したものとなっている。

講演では、迷走する日本の英語教育について、(アメリカ)英語を模倣することを絶対視する戦後日本の英語教育政策と、発音上・文法上「(アメリカ英語を基準として)正しい」ことを重視するあまり、エラーを一切許容せず、「正しく」できないなら話すな・書くなと言わんばかりの（実際に言っている例もあり）現代日本の英語（米語？）教育の、戦慄（あるいは失笑）すべき実例多数が採り上げられ、容赦なく批判された。

一方、アメリカ英語を基準とした発音や文法から外れていても、母音を省略せずに明確に発音し、ネイティブの基準では冗長度が高い「ニホン英語」の理解率はむしろ「米

語」より高い、というデータが実証実験に基づいて示された上で、自信を持って「ニホン英語」を話すべき、教師も教えるべきである、と結論された。

なお、字数（と報告者の度胸）の制約上詳細を省いた「戦慄すべき実例」については、先生の近著『ニホン英語は世界で通じる』（平凡社新書）にも多数収録されているので、ぜひ一読いただきたい。

第 26 回 全国大会を振り返って

河原俊昭（京都光華女子大学）

大会当日はあいにく雨であったが、多くの人々が参加して熱気あふれる大会となった。会場の神戸芸術工科大学は芸術系の大学らしく、独特の魅力ある雰囲気に包まれていた。このような素晴らしい会場を提供いただいた会場校の岡村光浩先生と西村太一先生に、まず感謝の意を表したい。

大会の冒頭は石田雅近新会長から会長の交代の報告と新たな決意表明があった。続いて、末延岑夫会員による基調講演「日本の個性—ニホン英語」があった。講演はユーモアにあふれて、いつもながらの語り of 巧妙さで聴衆の心をつかんだ。ネイティブ信仰への痛烈な批判があり、学習指導要領や著名な方の本や論文を例に挙げながら、痛烈な批判をされるので、聞き手としては時にはヒヤヒヤするのであるが、権威に対して堂々と立ち向かう講演者の姿勢には拍手したい。なお、講演者の『ニホン英語は世界で通じる』という本が、平凡社から近々発売されるそうであるので是非とも読んでみたい。

お昼の総会の時には、会計報告などがあったが、特筆すべきことは、本名信行前会長に対して、長年の学会への功績をたたえて、花束贈呈が行われたことである。

午後の研究発表は、新進気鋭の4名の会員から発表が行われた。はじめに、Wulan Fauzanna 会員によるインドネシアの Padang の教員たちの各種英語への preference の調査発表があった。そこでは、native Englishes を高く評価する教員が多いとの報告がされた。続いて、Saya Ike 会員による head movement の研究報告があった。ビデオを提示しながら、日本人が会話するときの nodding する特徴を報告している。Leah Gilner 会員による英語変種の語彙研究も興味深かった。7つの英語変種を比較して、変種どうしが、多くの語彙を共有している姿を示した。また、type, token, token coverage, lemmatization などの用語の定義も有益であった。花元宏城会員による World Englishes への高校生の認識と発話理解の報告は、高校生を対象とした点が目新しかった。榮谷温子会員によるアラブ首長国連邦の言語事情の報告は、多くの会員にとって知ることの少ないアブダビとドバイの言語事情を知ることの出来たという意味で有益であった。これら4名の発表は、従来の発表とは異なる視点が多く、アジア英語研究の新しい方向性を示すものとして興味深い。

シンポジウムは「ニホン英語の可能性」として、4名の

パネリストから発表があった。午前の基調講演と呼応する点が多く、大会の締めくくりとして相応しいシンポジウムとなった。James D'Angelo 会員から WE の概念が時系列的にどのように発達してきたか説明があり、Borderless English の提案があった。続いて田嶋ティナ宏子会員から、母音の長さ and intelligibility が結びついていることが示された。小田節子会員からは、学生の英語を分析しながら、何が影響を与えているかについて考察があった。日野信行会員からは、Japanese English のモデルに関して説明があり、日本人としてのアイデンティティを示すのは Japanese English であるという信念が語られたのであった。フロアからも活発な質問や意見が出されて、きわめて盛り上がることとなった。

以上、全体的に振り返って Japanese English とは何かという問いかけに対して、いろいろな答えが会員から示されたという点が本大会の特徴となったように感じる。その点でたいへん貴重な大会であったと思われる。

J A F A E C l o s i n g P a n e l Is Japanese English Possible?

James F. D'Angelo (Chukyo University)

The most recent JAF AE conference was concluded with a final panel, chaired by myself, with papers by longtime JAF AE members Tina Tajima, Setsuko Oda, Nobuyuki Hino and the author. Entitled "The Possibility of Japanese English," the panel revisited what is perhaps the most fundamental issue for JAF AE, that which is closest to our *raison d'être*, or 'sonzai-igi.' For as believers in the reality of new varieties of English in Asia, recognition of some form of Japanese English is close to our organizational mission. JAF AE is closely linked to the concept of world Englishes, but as founder Nobuyuki Honna has shown, for Japan, viewing English as a Multicultural language (EML?) is perhaps more appropriate. Also, Nobuyuki Hino has often validly expressed dissatisfaction with Kachru's portrayal of Expanding Circle Englishes as 'performance' varieties.

So this was a timely chance to take a new look at the state of Japanese English. Professor Hino delivered the first paper, with an impressive PowerPoint presentation, and his trademark peripatetic, thoughtful lecture style, in which he walks about the stage in a relaxed manner. For Hino, Japanese English is internationally communicative English based on and capable of expressing Japanese values. He outlined his own idiolect of Japanese English, which is informed by various features which help him express his identity. It is Japanese, Osaka,

Hawaii-influenced, born in the late '50s, male, father of two sons (one disabled), University professor, English teacher, law department graduate, classic rock lover English! Our English is the product of our past experiences after all.

Hino feels that the lack of intra-national use of English by Japanese is irrelevant, since the language is not needed among Japanese as a link language as it would be in Singapore, Nigeria, India or the Philippines. It is difficult to codify Japanese English as a teaching model, but Hino went far to try and give a description of linguistic and meta-linguistic features of Japanese English. Giving concrete examples, he explained that J-English is syllable-timed with rare elision, linking, reduction or assimilation. The definite article 'the' is used with high frequency (high-context culture), and there is no distinction between 'will' and 'be going to.' Also, it is not necessary to use American terms such as 'junior in college' which do not make sense in Japan. From a pragmatics or discourse point of view, it shows frequent back-channeling (as could be seen via Saya Ike's paper in the same conference), the importance of family name calling (elder brother, etc.), and balance-oriented argumentation. One scholar later expressed the desire to see more empirical data from Hino to support his analysis, but I feel he is very accurate in his perceptions about Japanese English.

Hino was followed by Setsuko Oda, who delivered a paper on the formation and globalization of 'Japanese English.' She drew on Edgar Schneider's 2003 work, which states that, "a theory of development of new Englishes should be able to be applied to all the English contexts in the globe." Schneider is known for his 5-stage theory, which progresses from foundation, to exonormative stabilization, nativisation, endonormative stabilization, and differentiation. Oda feels that English is increasing a bit for intra-national uses, citing the adoption of English by Uniqlo and more recently Rakuten, for all internal and external communication. She also feels that expansion of freshman English programs and degree programs offered in English, may be creating new **speech communities** which can strengthen development of J-English. Accordingly, she has launched a new research project at Kinjo University, to gather data on the English interaction of her own students. This project shows promise in documenting Japanese

learner English, and as Paroo Nihalani has often said, data is crucial to work in this field. I look forward to her further work in this area, which may yield an important contribution to our understanding of English in Japan.

Following Oda's presentation, Hiroko Tina Tajima—longtime past Secretariat of JAF AE—presented the findings of a major intelligibility experiment she has done in cooperation with Professor Oda. Various findings from this work have been presented by Oda at the joint JAF AE/IAICS conference last year in Kumamoto, and also at the 15th IAW E in Cebu Island. Various speakers judged Japanese English via taped recordings of reading passages. Tajima employed a template of 20 different aspects of speech (syllable vs. stress-timed, epenthesis, segmentals, etc.) to ask inter-raters to judge which were the most significant with regard to intelligibility. Using sophisticated statistical tools, Tajima did not go into detail on the process of this statistical work, but referred conference attendees to the paper on the subject, which was just published in the latest JAF AE Journal. The data seems valuable in that it clearly identifies vowel length as the aspect most crucially correlated with intelligibility of J-English. Indeed, I can think of my own 2005 experiment, in which students pronounced 'determine' as 'de-ter-**mine**' as an example of this danger. One drawback of the paper is that while it offers a plethora of statistical data, I would wish for more concrete examples of the vowel length problem. The authors may have access to this data, and may outline it in a later paper.



The final paper was given by the author. I called my paper 'Japanese English? Refocusing the Discussion.' While outlining the debts we owe to the world Englishes paradigm, my main point was that with the emergence of ELF studies in Vienna (the

Voice Corpus), with its methodology now wholly adopted by Andy Kirkpatrick of Hong Kong Institute of Education in the major ASEAN+3 'Asian Corpus of English' (ACE) Project, it is no longer so necessary for us to try and claim the legitimacy of a codifiable Japanese variety of English. Other new paradigms, based on world Englishes, are emerging to try to better describe what is going on in the Expanding Circle. We may still and should still conduct work to codify the English spoken by Japanese, but as Hino stresses, the language does function mainly as an international tool for Japanese. I have been asked by Andy to head up developing the Japanese component of this corpus, so I would encourage any JAF AE volunteers who would like to help with this daunting task. In addition to ELF, Aya Matsuda of Arizona State U., and Farzad Sharifian of Monash U. in Melbourne, have made a significant effort to begin renewed research on a new form of EIL: something that goes beyond the pioneering work of Larry Smith, to incorporate Lakeoff-ian constructs such as *meta*-culture and his 'cultural conceptualizations' to give EIL a more cognitive linguistics base.

As usual, although I worked for the week before the conference to again and again trim down my presentation, I included a bit too much in my PowerPoint slides, and as Professor Yano advised me in Cebu, at JAF AE Beverly Lafaye recommended that I trim down the slides, and perhaps provide more details in the handout, and I will work towards getting to that point with future presentations. Indeed, this is the value of JAF AE, which has always provided constructive criticism as a key part of our learning process.

The panel was followed by a lively Q&A session, in which most questions were directed to Hino sensei. His presentations have a knack for stimulating responses. One attendee insisted that most of his observations about J-English were at the phonological level, but fewer were at the lexical or syntactic level. Hino did a nice job of fielding such questions, and I think he demonstrated that indeed, via the L1 and Japanese culture's influence, the effects on the language are pervasive, and cut across all linguistic areas.

I feel that the panel did a good job to present the current status of English in Japan, and hope that we hold a similar discussion every two years, as the pace of change increases in this globalised era.

本名信行前会長を名誉会長に

今大会の会員総会において、石田会長から前会長で学会の創設者でもある本名信行先生を名誉会長とする案が出され、承認が得られました。本名先生には学会創設から現在に至るまで多年の重責を果たされ、学会をリードしてくださいました。今後も学会の発展のためにご指導くださいますことをお願い申し上げます。



多年の重責を果たされた本名先生を名誉会長に

広州へのスタディツアーを振り返って

齋藤智恵 (国際医療福祉大学)

2010年のスタディツアーは、6月17日から21日まで、4泊5日の日程で、International Association for Intercultural Communication Studies (IAICS)とSouth China University of Technology (華南理工大學)の主催による国際学会への参加を主な目的などとして実施された。10名のJAF AE会員が、論文発表や会議に参加し、各国からの参加者と意見交換をする機会を得た。



スタディツアー参加者を代表して竹下裕子先生より、第16回IAICS実行委員長のAn Ran華南理工大學教授には記念品を差し上げた。残念ながら、タイトなスケジュールのため、現地教員との交流会などは実施することができなかったが、参加者それぞれが、中国を中心とする研究者との交流、そして中国、広州の熱気を体験することができた。

のではないだろうか。

私の参加したセッションは、中国からの参加者が 2 名、フィリピンからの参加者がおり、トピックは多言語表示から、英語教員、少数民族に関するものまで様々であった。日本のアイヌとフィリピンの少数民族の言語保持に関する政府の対応を比較した発表では、アイヌは恵まれた民族として捉えられており、日本国内からアイヌを見る視点との違いを感じた。

学会の会場である広東ホテルは、広州の北京路というメインストリートにほど近い場所に位置していた。夕食後に中国からの参加者と一緒に北京路を散歩することになった。高温多湿の気候だけでなく、何とんでも人の多さに驚かされた。夜 10 時近くになっても、たくさんの人々が買い物を楽しんでいた。

北京路には数件の大きな書店があり、英語学習のコーナーには、日本と同様に参考書や辞書を販売している。しかし、日本の書店との大きな違いは、小学生用の英語の教科書がずらりと並んでいたことだろうか。小学校 1 年生用、2 年生用もある。小学校高学年用は、内容が充実していることに加えて、難易度の高さにも驚かされた。



3 日間の学会を通して、多くのことを学び、多くの人々に出会った。そして、日本各地から参加した JAF AE メンバーとの交流を深められたことが、何ものにも代えがたい収穫であったと思う。最後に、前 JAF AE 会長の本名信行先生、また、このスタディツアーの企画から実施までご尽力いただいた竹下裕子先生に心から感謝申し上げたい。

英語の多文化化と異文化間リテラシー

本名信行 (青山学院大学名誉教授)

英語が英米文化の枠を越えて、多様な変種を包摂する多文化言語になると、新たな問題が生じる。それは変種の違う話し手どうしで、相互理解がうまくいかなくなるという可能性である。これは現実にも生じているし、将来ますます多くの人々が英語を使うようになれば、もっとひんぱんに意識させられると想像される。

これらの問題に対処する方法は、いくつか考えられる。ひとつは、標準化案である。諸変種の普及は、相互理解を困難にするので、ひとつのパターンに再統一しようという

考え方である。これは一見、当然の方法のように思われるが、はたしてそうであろうか。そもそも英語の普及にあたって、標準化案は英米パターンを確立させる方法であった。

しかし、現実には生じたのはそれではなく、英語の多文化化であった。つまり、標準化は多文化化を防止する案であったのに、その機能をはたせなかった。多文化化の防止に役立たなかった方策を、多文化を規制するのに再度用いるのは、無意味といわざるをえない。そこで、異変種間相互理解不全の問題を解決する道は、別のところに求めなければならない。

すなわち、多文化性を受容し、育成しながら、相互理解を図る新しい方法を発見しなければならないのである。それは多様性のマネージメントである。そして、その方法として、異文化間リテラシーの育成が求められる。それは、異文化間接触のさいに、各自がそれぞれの文化的メッセージを適切に伝達し、そして相手のそれを十分に理解する能力を意味する。さらに、文化間の差違を互恵的に調整する能力も含む。英語学習の一般的目標は、このような言語運用能力の獲得にあることはいままでもない。

そして、注意すべきことに、異文化間リテラシーの育成には、言語意識を高めることが効果的と思われる。たしかに、私たちは異文化間の問題について、ことばを使ったやりとりのなかで、最も身近に感じる。マレーシア人は開口一番、"Have you eaten?" などと言うことがある。どうしてこんなことを言うのか、なかなかわからない。しかし、ことばの働きと仕組みを理解すると、上記の表現は質問でなく、あいさつに使われていることがわかる。あいさつことばは、実に多様なのである。

このように考えると、異文化間リテラシーのための言語意識教育は、「国際言語としての英語」教育でますます重要になると思われる。私たちはこういった多様性のマネージメントの教育プログラムを開発し、英語教育のなかに組み込まなければならない。私は、このようなプログラムでは、社会言語学と認知言語学の情報が大変重要と考えている。そして、その手法としては、以前にあった cultural assimilator ではなく、新しい考え方にもとづく intercultural accommodator が適切と思っている。

新 刊 書 籍 紹 介



『ニホン英語は世界で通じる』

(平凡社新書)

末延 岑生 (著)平凡社

ISBN-10: 4582855350

760 円(税込 798 円)

*次号の書評で詳しく紹介します(編集者)

紀 要 編 集 委 員 会 よ り

紀要編集委員長 日野信行 (大阪大学)

7月の全国大会の総会で御報告いたしましたように、今後、紀要への原稿提出においては、郵便ではなく、電子メールの添付ファイルで提出していただくことになりました。この新しい投稿規程については、学会のホームページ (http://www.jafae.org/journal_contri_rule.html) をご覧いただければ幸いです。河原俊昭先生の作成による便利なテンプレートもダウンロードできますので、どうぞご利用ください。なお、投稿の締め切りは従来通り 11 月末日です。

会 計 会 報

樋口謙一郎 (相山女学園大学)

1) 年会費納入について

現在、2010 年度の会費の納入を受け付けております。納入方お願い致します。会費は、一般会員 5,000 円、学生会員 3,000 円です。ゆうちょ銀行以外の金融口座からもお振り込みいただけるようになりました。振込口座は下記の通りです。

★ゆうちょ銀行 (郵便局) からは、
加入者名：日本「アジア英語」学会
口座番号：00280-8-3239

★銀行などからは、
ゆうちょ銀行
○二九店 (ゼロニキユウ店)
当座預金口座 0003239
ニホン「アジアエイゴ」ガツカイ

2) 2009 年度決算・2010 年度予算

2010 年度会員総会時に 2009 年度決算、2010 年度予算が承認されました。以下、報告いたします。

日本アジア英語学会 2009 年度決算

収入の部			
費 目	2009 年度 決算額(A)	2009 年度 予算額(B)	増減(A-B)
年会費	710,000	1,120,000	△410,000
全国大会参加費	0	50,000	△50,000
モノグラフ紀要売上	11,490	40,000	△28,510
大会補助金	0	0	0
その他 (貯金利息)	130	0	130
ESSC ガイドブック 売上	0	0	0
前年度繰越金 (15 周年積立金除く)	161,824	161,824	0
合計	883,444	1,371,824	△488,380

支出の部			
費 目	2009 年度 決算額(A)	2009 年度 予算額(B)	増減(A-B)
通信費	87,900	180,000	△92,100
ニューズレター 印刷費	0	0	0
紀要制作費	134,400	200,000	△65,600
文房具	0	5,000	△5,000
全国大会	4,794	200,000	△195,206
人件費	25,000	50,000	△25,000
インターネット利 用料ウェブサイト 保守管理	85,725	90,000	△4,275
印刷代	0	30,000	△30,000
事務局運営費	3,798	100,000	△96,202
モノグラフ補助費	0	80,000	△80,000
研究助成金	100,105	100,000	105
15 周年記念事業 積立金	150,000	150,000	0
ESSC 事業費	115,071	100,000	15,071
次年度繰越金	176,651	86,824	89,827
合計	883,444	1,371,824	△488,380

15 周年記念事業積立金残高	400,000
----------------	---------

上記の通り、ご報告いたします。

2010 年 5 月 30 日 会計 樋口謙一郎

2009 年度決算報告の監査を行った結果、適正であると認めます。

2010 年 6 月 20 日 会計監査 森住衛

会計監査 矢野安剛

日本「アジア英語」学会 2010 年度予算(案)

収入の部			
費 目	2010 年度 予算額(A)	2009 年度 予算額(B)	増減(A-B)
年会費	1,120,000	1,120,000	0
(正会員 200 名)	(1,000,000)	(1,000,000)	(0)
(学生会員 20 名)	(60,000)	(60,000)	(0)
(法人会員 2 名)	(60,000)	(60,000)	(0)
全国大会参加費	50,000	50,000	0
モノグラフ・紀要売上	40,000	40,000	0
大会補助金	0	0	0
ESSC ガイドブック売上	0	0	0
前年度繰越金	176,651	161,824	14,827
合計	1,386,651	1,371,824	14,827

支 出 の 部			
費 目	2010年度 予算額(A)	2009年度 予算額(B)	増減(A-B)
通信費	70,000	180,000	△110,000
ニューズレター 印刷費	0	0	0
紀要制作費	200,000	200,000	0
文房具	10,000	5,000	5,000
全国大会	200,000	200,000	0
人件費	50,000	50,000	0
インターネット利用 料・ウェブサイト保 守管理	90,000	90,000	0
印刷代	30,000	30,000	0
事務局運営費	100,000	100,000	0
モノグラフ補助費	80,000	80,000	0
研究助成金	100,000	100,000	0
15周年記念事業 積立金	150,000	150,000	0
ESSC 事業費	100,000	100,000	0
次年度繰越金	206,651	86,824	119,827
合計	1,386,651	1,371,824	14,827

15周年積立金残高(2009年度分までの積立額) 400,000

The ESSC 2010

We are now accepting your entries for the ESSC 2010, which takes place as an international competition for the participants from China, the Far East Russia, Korea and Japan.

* The ESSC 2010 will be held from May 10 to September 30, 2010. During the period we will accept entries from the learners of English in China, the Far East Russia, Korea and Japan.

事務局より

第27回全国大会の研究発表者募集

第27回全国大会を12月4日(土)に東京経済大学(東京都国分寺市)で開催します。

第27回全国大会 研究発表者募集

第27回全国大会(2010年12月4(土)於東京経済大学)で研究発表を希望される会員は、アブストラクト(日英どちらか)をA4 Word 文書1枚にまとめ、9月25日(土)までに事務局に電子メールの添付にてお送りください[jafae@live.jp]。審査を経て発表者を決定いたします。

CALL FOR PAPERS

for the 27th National Conference on December 4th, 2010 at Tokyo Keizai University. Please submit a 1-page abstract as MS Word attachment by September 25, 2010, to the JAF AE Secretariat at [jafae@live.jp]. All submissions will be carefully reviewed.

ニューズレター編集担当より

本号からニューズレターの担当になりました榎木園です。私は第4号から第14号までのニューズレターを編集しておりましたので、久々の再登板ということになります。

ニューズレターは会員の大切なコミュニケーションの場ですので、会員の皆様からのご投稿を歓迎しております。国内外の紀行文、書籍紹介、海外情報など、「アジア」「英語」「言語」周辺をキーワードに、日本語800~1,200字程度、あるいは英語ではA4用紙2/3~1ページ程度の分量でどンドン投稿して下さい。編集の都合上、投稿を希望される方は、9月下旬までに編集担当の榎木園(htenokizono@yahoo.co.jp)までご連絡下さるようお願い申し上げます。

次号(32号)は2010年度海外研修「中国・広州」特集号で、10月下旬頃に発行(配信)予定です。今号で紹介した末延先生の新刊書の書評も掲載いたします。ご期待ください。

2010年8月23日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 石田雅近

編集長 榎木園鉄也

事務局

〒615-8558京都市右京区西院笠目町6

京都外国語大学 外国語学部 英米語学科

相川真佐夫 研究室内

E-mail: jafae@live.jp

FAX: 075-322-6079

学会ホームページ: <http://www.jafae.org>

年会費振込先: 郵便振替 00280-8-3239

<< JAF AE Secretariat >>

Prof. Masao Aikawa

Faculty of Foreign Studies

Kyoto University of Foreign Studies

6 Saiin Kasame-cho, Ukyo-ku,

Kyoto City 615-8558 JAPAN

FAX: +81-75-322-6079

E-mail: jafae@live.jp

JAF AE's website: <http://www.jafae.org>

JAF AE's postal transfer account number:

00280-8-3239